



福井県教育委員会

教育長 東村健治氏

皆さん、こんにちは。本日は県内七十六校の校長先生方がお集まりになり、平成三十一年度の福井県中学校長会研修会が盛大に開催されますことをお祝い申し上げます。

さて、福井国体・障スポの開催に当たり、皆様のお力添えを頂き、児童、生徒合わせて約四万六〇〇〇人の応援をいただいたと聞いております。本日に各会場で、一生懸命の応援を頂いたおかげで、天皇杯、皇后杯を取ることができたと思っております。

本県は、四十九種目で優勝し、天皇杯とともに、五十年前には取れなかった皇后杯を、今回は取ることができました。皆さんの教え子も高校生や社会人として活躍されたのではないかなと思っております。

福井県は例年、冬季国体の点数は〇点に近かったのですが、今回は、冬季国体が終わった時点で一六六点を取っており、東京都とは一六六点差で本国体に臨むことになりました。

本国体の会期前開催競技では、まず水泳では、東京が三六七・五五点、福井が三三三・五五点。ここで三三三・四四点の差が開きました。その後、ハンドボール競技が終わった時点で東京と三七六点差。これがマックスのマイナスでした。次の自転車競技がとてつもなく盛り上げてくれて、三〇七点差で本国体に入りました。

本国体では、はじめに、活躍してくれたのがソフトボール、それから剣道などです。東京との差がどんどん詰まっていきました。十月二日にマイナス三七点となりました。

ここで、私はもう勝つのではないかと思います。というものは、三日にポルト競技の決勝レースがあったのです。ポルトは前回の国体で二一三点を獲得、東京都もそれに圧力的に強い。ポルト競技の総合計点が二八八点で、その内二六四点を福井県が獲得したことで、勝利を確信したわけですね。

その後、お家芸である体操や、ホッケーも頑張ってくれました。

そして、最後は六五〇点の差をつけての優勝でした。この二年間、東京都は大体二五〇〇点を取っており、福井県は二六〇〇点を取らないと勝てないということで競技力の強化に当たっていました。その結果、福井は東京を六五〇点引

き離し、われわれの予想の三五〇点も上回ることでできました。

いかに大東京といえども、心を一つにして戦えば、何とかなるということが一つ証明できたかなと特に中高生の皆さんには、良い意味での福井県の力、底力を感じていただけた大会ではないかなと思っております。

また、多くの皇族の方がお見えになり、初日は天皇陛下がお見えになりました。九月二十八日、快晴の中、教育博物館にお越しいただき、歴代の教科書をご覧になりました。天皇陛下は尋常小学校の最後の入学生、皇后陛下は国民学校の最初の入学生だそうです。両陛下とも教科書が違い、今のよう

に検定ではなくて、国定教科書なので、日本中、同じ教科書を使っており、天皇陛下は「これは僕は知らない」、皇后陛下は「私はこの教科書だったわね」ということを両陛下でお話しされていたようです。

その中で、全部、カタカナで「サイタ サイタ サクラ ガサイタ」で始まるのが尋常小学校の最後の教科書だったそうです。これをご覧になっていて、皇后陛下が「確かこの後は『コイ コイ シロ コイ』だったわね」とおっしゃったそうです。シロというのは犬のシロです。吉田館長がばつとページをめくったら「コイ コイ シロ コイ」と書いてあったのです。皆さん、小学校一年生の教科書の二ページ目をご存じですか？ 誰も覚えていませんよ

ね。それを皇后陛下はご存じでした。そういうエピソードがあつて、その後吉田館長がインタビューにお答えになったのがまた素晴らしいので、「天皇、皇后両陛下には教科書の重要さを改めて教えていただいた」とコメントしたので。このコメントには、我々もちょっと泣きました。自分だったら、何と言っていたかなと思いつつながら聞いていました。本当にここに教育の原点もあるのかなという気がして、陛下がお越しになったことを我々としても大事にしながら、教育を進めていかなければという思いをしたところです。

さて、平成三十一年度の入試につきましましては、国体に向けた競技力の向上の継続も考えながら、各高校の特色を強く打ち出すために、スポーツや文化分野などに関する適性・能力が優れた生徒を対象とする「特色選抜」を設けたところですね。これを、ぜひ生徒の進路の有意義な選択肢の一つとしていただければと思っております。

また、英検については、従来の十五点、十点、五点という加点を見直し、高校により三級、準二級、いづれかで五点を加点することによって、当面、一段落したのかなと思っております。

それから、平成二十九年度の「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」の結果がまとまり、非常に残念ながら、不登校生については、平成二十

四年度を底に、今、少しずつ上がり続けているという状況でございます。

子どもさんには、とにかくしっかり生きる力を身に付けてもらいたいと思っております。そして、親御さんや関係者の皆さんのご心配を考えれば、やはり、何とか学校で手厚く、その子どもたちの成長を促していくという方策が取れないかということですね。そのために、先ほどご紹介いただいた冊子などもつくり、お分けていますので、ぜひとも役立てていただければと思っております。

福井の教育を支えているのは、やはり学校経営のトップである校長先生方だと思っております。子どもたちの学力、体力のさらなる向上に向けて、また保護者や地域から信頼される学校づくりにも一層取り組んでいただきたいと思います。

最後に、これまでの取り組みについて満足することなく、常に検証、そして見直しを行っていただきたい。そして、本日の研修会を存分に役立てていただき、本県の中学校教育のさらなる充実、発展に努めていただくとともに、皆さんのますますのご健勝とご活躍を併せてご祈念申し上げます。開会のごあいさつとさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いたします。



【演題】

今の校長に求められていること

鳴門教育大学 大学院学校教育研究科 高度学校教育実践専攻
兵庫教育大学 連合大学院 先端課題実践開発専攻

教授 前田 洋一氏



昔から福井は学力が高くて、昭和五十五年に行なわれた学力調査でも非常に学力は高かったのです。いろいろな学者が何で福井の学力は高いのかというこ

とをよく分析しています。一つは、教員の授業力向上に対する行政や積極的な働きかけがあります。学校の外部組織の積極的な働きかけがある、学校における管理職と教員の協力関係があるとか、子どもたちが素直で家庭が安定している。さらには、厳しい自然を生き抜く勤勉で連帯感のある地域や風土であるなどです。でも、これは本当だと思いませんか。秋田の場合は、教育委員会のリーダーシップとノート指導を一生懸命やって上げてきた、福井の場合は、教員の自主的な研究組織や教員OB、校長会などの外部組織が主導しているというふうに書いてあるんですが、これも「本当か？」と言いたくなるところがちよつとあります。

福井は確かに学力は高い。しかし、それが、学校組織力が高いから学力が高いという方程式が成り立つんだらうかということをお私としては疑問に思うわけです。学校が組織マネジメントやPDCA、県の学力調査などそのようなことを言う前から高いのです。本当に学力が高いことと学校組織がどういふふうになつていのかということを一回考えてみないといけないというのが私の今思っていることです。福井県の学力調査の結果を見ると、すべての中学校が全国

平均以上の成績をとつています。ところが、分散が小さいです。これだけ平均化されている学力を持つている県というのは他にはありません。秋田も学力は高いですが、ばらつきがもう少し大きいです。なぜ学力がそれほど均一化されているかというところ、受けている教育が均一なものではないかと考えることができます。全国学力調査と先生の学歴の関係を見ると、福井県は八一・六%が教員養成系出身者で、福井と秋田を見ると小学校はどうしても教員養成系大学の出身者が多いです。しかし、高知県を見ると教員の五人に一人しかいません。沖縄県でもやはり二割です。福井県は異常に高いです。したがって可能性として福井は教科に関する専門的な知識があり、これが多分散が少ない要因ではないかと考えることもできます。それから、小・中経験者が多い。他県はそれぞれ個別に採用するので、小学校・中学校でどんなことをしているかは全く知らないです。また、福井の教員は生活環境もよく似ていて長男が多い。そのため基本的に同じ文化を持っています。

福井のよさというのは、同じ文化を持った教員が集団を作っているという、全国的に非常にまれな状況であることが分かり

ます。そこで、福井の学校組織を一回見直してみる必要があると思います。福井の学校文化・組織というのは、学校の中でメンバーとしていたために何か規範、ルールが働いています。それは何か言語化されているルールではなくて、そこに所属するためにどう立ち居振る舞うかというようなものです。もう一つ大事なことは、福井の教員には水面下に暗黙のルールというものがあります。実はこれがものすごく大事だと思えます。福井は他者との関係性を重視する。そうすると、関係相手との価値観の同一性というのが求められます。学校という組織を作ろうとすると同じことを考えていることがものすごく大事であり、福井県は十五歳のときからお互いが旧知の仲という状態です。そのストレスがほとんどなく構築されていくという特徴があります。関係が深い人との規範を優先するので、相手によっては規範の強弱が変化したり、その組織の間はずつとそれを要求されてしまったりすることがあります。つまり教師としての役割ではなく人に対する義務、そういう集団にいる義務だから必然的に一生懸命にやるということなんです。それは実は制限が加わらなくて、どんどん行ってしまう可能性が出てきます。これは限界がなく、相手の

関係性だけで善悪が決まってしまうので、際限なくずつと進んでしまう危険性もあります。関係性を重視する規範に乗った学校文化は、関係性の善悪を一番基調にしている。つまり、人間関係を基調にしているという風土である可能性がすごく高く、ものすごく強力です。そうすると、関係性が大事なことで、無制限に頑張らないといけなくなりません。それで、こういう視点で学校組織を考えていこうというふうにならなければならぬわけです。

学校組織マネジメントという言葉が出てくるのは二〇〇〇年ぐらいです。学校マネジメントの基本というのは、人・物・金・情報の管理です。企業はナンバーを指しています。つまり優位性ですね。ところが、学校というのは優位を目指すのではなくて、子どもたちが一番利益を得るにはどうすればいいか。つまり、一番を目指すのではなくて、子どもたちが満足する学校づくりをするということです。学校組織とは目的によって対象となる、管理する、マネジメントするべき人員の種類が変わっていきま

バーナードは、組織とは何かという定義に関して、「二人以上

の人が集まって意図的に調整されたもの」と言っています。そして学校組織には次の三つの原理があります。統制の原理、合意の原理、自立の原理です。どうということかという、それは

学校組織とは自立性と協働性と統制がある。みんなが心から思うわない限り協働できないので、みんなが目標を作っていくときに参加すれば、価値の自発的修正が起こるのではないかということを言われるからです。

それと、目標を共有化するというところを見ると、学校教育目標をみんなが決めたとところで、答えは全部知・徳・体です。そのため、初期の段階での目標の設定や合意はあまり必要がないと考えたほうが妥当かもしれませ

ん。そうすると、小集団でいる学校改善に取り組んでいるが、そのときに価値のことにあまり考えなくて、実際は改善のプロセスをやりながら価値を後付けをしていくことになってい

ます。学校組織が活性化するというのは一人一人の教職員のやる気が出てくればいいが、そのためには、頑張ったらいいいこと

があるということを一人一人が自覚するしかないのです。つまり効力感というのは、結果を期待し、こうなりたいというものと、そうなる道筋がちゃんと分かっていることが必要です。実は意識改革というのは結果であ

って、手段ではないです。行動を変えることによって意識を変えようという考え方を持たないと、学校組織は変わりませ

最近、よく「チーム学校」といわれますが、一番いいのは共存的協働。また、学校組織は同調的組織と協調的組織と二つに分けることができます。この観点から福井の学力が高いということ

を説明するとタテモチという制度が働いていると思います。一つのパフォーマンスとして、成績で、自分のクラスはどうだったのか、他のクラスよりいいのか、悪いのかと、いつも比べられる状態にある。学力をつけるとい

責任と規範がここに出来上がっているから、福井は同調的で、ものすごくみんなと一緒にやるし、責任を感じているし、だから、学校がうまく回っている状態なのです。

タテモチをしていると責任がすぐく明確になります。同調的なので、抜け駆けはできません。でも責任がものすごく固くはめ

られていないので、みんながやらなければならないとか、助け合わなければならないという行動が起きる。つまり、福井の教育というものは、初めから協働性を目指しているわけではないけれど、もともと福井の持っている文化が同調的であり、そこに個

人の責任感がうまく重なって、これだけの高いパフォーマンスを上げることができているのではないのでしょうか。

決断と判断というのがありますが、校長に、教頭なり誰かが「どうしたらいいですか」「決断してください」と来ますよね。管理者のすることは何かという

と決断ではないのです。判断するのです。「AとBがありますけれども、どちらがいいですか」「AとBとCがありますが、どれがいいですか。」のように問われるの

がいいです。案を一つしか持っていないで「いいですか？ 悪いですか？」というのは決断になります。必ず代案を提示させる。校長は判断をする人であって、決断をする人ではないのです。部下を育てるときに、もしも一案しか持っていないで、決断を上げに来た教頭

がいたら、「代案を持って来なさい。何が良く何が悪いかをちゃんと説明しなさい。」と。つまりそういうふうにしなさいと、

部下は育ちません。必ず「私は判断をする人。間違ったことはできません。答えがあるものを用意してあります。必ず案は二案以上持ってください。それについて、私は責任を取りま

す。どうなるか分からないものをやれという命令を出すことはできません。」というふう

に育てなければいけない。校長がリーダーシップを発揮するとき、校長だけが一生懸命やってもほとんどうまくいきません。自分の思いを言語化するというのがものすごく大事です。つまり自分のやりたいことを伝える。ただ、それも一方的に伝えても相手は分からないので、その辺のところをどう伝えていくか、実はそこがものすごく大事です。まずは教頭、

教務主任、研究主任、学年主任、そういう人たちとどんなふうにかついでにコミュニケーションを

もつていくか。つまり校長が直接話さなくても、教頭がちゃんと校長のやりたいこと、描いている夢、やりたいこと、というものをちゃんと職員に繋いでいるかが重要なポイントになります。目標を共有・連鎖するというのは、言葉が伝わるだけではなくて「確かにそうだ。あの校長はいつも多分、それを考えているだろう。」ということが職員に行動で伝わっていくということ



『占良水』

教育の一丁目一番地

成和中学校長 小倉浩一郎



職員玄関が何やら騒がしいなと思っていると、私を訪問するね若者が一人

やってきました。以前本校に勤務していた時、三年生で最も手のかかった生徒でした。担任の指示は聞かず、他の教師には暴言を吐くという始末。家出を繰り返すことも。そんな生徒でしたが、突然私を訪ね、「先生、校長してるって聞いて、どうしても行かなあかんと思いました。」と笑顔で挨拶をし、「俺、高校頑張つて卒業したんですよ。やめようと思ったこと何回もあるけど、先生の顔浮かぶと、頑張らなあかんと思え我慢したんですよ。」と得意顔で話を続けました。今、彼は三十五歳になり会社員として立派に働いています。

教師の働き方改革が叫ばれています。勤務環境の整備は私たちの喫緊の課題であることは明白です。同時に、生徒に寄り添い、熱

誠と努力を繰り返すことが教師としての一丁目一番地であり、苦勞の何倍もの充実感を得ることのできるやりがいのある職業だということをおそらくも伝えていければと考えます。

感謝

安居中学校長 徳永芳久



辞令を持つて、木造校舎を見上げながら初任校の門をくぐると、

五六豪雪の残骸がまだ横たわっていました。数学漬けの毎日から、突然、小学校四年生の担任。ギャングエイジを目の前にして、無我夢中の毎日が始まりました。何も知らずに飛び込んだ世界。学年主任をはじめ先輩教師の方々には本当にお世話になりました。保護者からも温かいアドバイスや手助けを受けました。若手の育ちを温かく見守る寛容さがありました。ここでの学びがずっとベースになっていたように思います。よき時代でした。恵まれていました。悩んだり、壁にぶつかったりしたときも、同僚と意見を交わし、走り回り、支えられて、乗り越えることができました。周りの人たちに教えて助けてもらって今の自分があります。素晴らしい出会いに感謝したいと思います。

後進の指導に関わるようになって、彼らに要求されている水準の高さ、スピードの速さに驚いていました。自分が三十八年前に同じことを求められたら、たぶん玉砕しているでしょう。易々とこなしていく若手が実に頼もしく思えます。しかし、危うさも感じています。三十の頃、学年主任から「現在は自分がしてあげるから、歳を取ったら、後輩にしてあげてね」と言われたことがあります。どこまでできたでしょうか。周りの人からいただいたご恩を少しでもこれからの人に返していけたらと思っています。

忘れ得ぬ学校

至民中学校長 吉村淑子



今年、至民中学校移転開校十周年・開校七十年記念式典を挙行了しました。

教諭時代の六年間、最後の学級担任、学年主任、教務主任とさまざまな経験をさせていただきました。最後に担任したクラスは、明るく、パワフルで大好きな学級でした。また、学年主任時代もスタッフに恵まれ、心に残る学年となりました。その頃から、移転開校に向けて、さまざまな研究をし、わくわくしながらワークショップにも参加しました。しかし、私は夢の学校が完成する前に異動しました。もう二度と至民中学校に勤務することはないだろうと思っていました。

ところが、移転開校十年目に縁

があったのか、校長として赴任することになりました。嬉しい気持ち半分、身の引き締まる思い半分でした。魅力あふれる校舎で特色ある運営をするために、校長として大切な事は、こんな学校にしたいという理念を繰り返し伝え、教員と目指すところを同じにすること、そんなシンプルなことに気づいたのは至民中学校でした。至民中学校は教員としての私と校長としての私をスキルアップさせてくれた忘れられない学校になりました。

成長するチャンス(試練)

川西中学校長 野口正人



「学校の荒れ」から始まった教員生活も後残りわずかに残り、振り返るとこの三十年余りの間に学校

が大きく変化してきたと思います。これは、学校現場を支えている教職員の努力並びに行政、関係機関の連携・協力による教育改革の成果だと感じています。

この改革期に、若輩者の私に、多くの先輩方から成長するチャンス(試練)を与えていただきました。それに向き合うことで自らを鍛えてこられたのではないかなと思っています。子どもの「やる気」を引き出せる教員になりたい。「分かる」「喜び」「できる」「楽しさ」を味わえる授業がしたいという初心を忘れることなく歩んでこ

人生・仕事の方程式

足羽第一中学校長 藤田清憲



新採用を終え福井市に戻り、K中学校にお世話になり、ここで教

員としての「イロハ」を学びました。「我々は運命共同体だ。構えず、気取らず素直な心で生徒に正面からぶつかれ。」との信念でリードしてくれた学年主任をはじめ、管理職、教員集団は今思えばそうそうたるメンバーでした。時代が昭和から平成に遷り、生徒指導困難校として学校の荒れ

はまだ残っており、家庭訪問で夜遅くなったり、若気の至りで失敗し上司から指導されたりした後も、いつもたくさんの先生方が残ってくれ、相談に乗ってくれました。このように私を高めてくれたのは、一期一会の縁で結ばれた「仲間」でした。

また、管理職となり、その在り様を「書物」にも求めました。今、教員生活を振り返ると自分を高めてくれたものは、「仲間」と「書物」だったと思います。

稲盛和夫氏が人生・仕事の結果(方程式)＝考え方×熱意×能力と言われているように、積の三つの要素で人生・仕事の結果は大きく変わってきます。私は「仲間」、「書物」を養分として、今後も自分を成長させ、少しでも恩返しができるばと思っていま

「国体」のご縁に感謝

松岡中学校長 鈴木 広幸



松岡中学校に赴任し、国体推進課に立ち寄った際、

「先生、ソフトボール競技があまり進んでないんですよ。」と言われたことが国体運営に携わったきっかけである。新採用とともに選手として、その後は指導者の一人として、教員人生と共に歩んできた『ソフトボール競技』である。当初は、定年の年に地元での開催も何かの

ご縁と気軽に請け負った。

しかし、その準備運営は想像以上に大変であることを、やってみてはじめて実感し、途中で何度も後悔した。しかし、最後まで踏ん張れたのは「自分から協力する」と手を挙げた。」ということだけである。そして、裏方の大変さを改めて学ばせていただいた。運営では、前年のプレ大会も、本国体も台風にも悩まされた。実は、地区や県中体連専門部の副部長時代は、いつも『雨男』と呼ばれていたが、ここでもやっぱり雨か……。

それでも、教え子が選手として、あるいは球場アナウンスとして大活躍してくれた。本校生徒が始球式を務め、球場整備にも頑張ってくれた。町民はもちろん、各小中学校の児童生徒や教職員も、応援旗の作成や応援・運営ボランティアとして協力してくれている。まさに町を挙げての協力体制が、大成功につながったのだと思う。五十年ぶりの福井国体での「感動と思い出」は、私の教員人生とソフトボール人生の「新たな宝物」と心から感謝している。

ありがとうございました

丸岡南中学校長 松嶋 美治



教員生活三十七年、あと半年ほどで退職を迎える。体育祭閉会の挨拶で子どもたちの頑張りを讃え、感謝を伝えて式台を下りた時、

今まで感じたことがなかった複雑な気持ちを感じた。

小中合わせて六校で勤務させていただいた。採用になった昭和五十七年頃は全国的に中学校が荒れていた時代で、赴任した学校でも悪戦苦闘の毎日だった。しかし、初任校で学んだ経験はその後の私の大きな礎となった。

そして、三国中学校時代は、男子バレー部で思う存分活動に打ち込ませていただいた。時には生意気な言動で周りの方々に不快な思いをおかけしたと反省しているが、子どもたちと夢を掲げるとともに流した汗や涙は私の大きな自信となった。その間たくさんの人たちと出会い、気づかせていただいた教えは、今でも貴重な財産だと思いい感謝の言葉しかない。

最後に校長として何一つできなかったが、子どもたちを信じて、素晴らしい保護者や先生方と一緒に知恵を絞り取り組んだ充実した日々であったとつくづく感じる。あらためて人との出会いに恵まれた幸せな教員生活であったなと思う。

出会ったすべての方々に心からお礼を申し上げます。「ありがとうございました。」

日々改善

鯖江中学校長 窪田 政一



「日々改善」自身の座右の銘であり、学校経営のモットーとしてきたことです。昨日よりは今日、一歩前に踏み出そうと心がけてきたつもりです。

しかし、実際の私は完璧を求め人間でなく、時には課題から目を背け、「何とかなる」「三日坊主でも一歩前進ならそれでいい」「つらかったら一休み」など、自分に緩く過ごしてきました。だからこそ教員を長く勤め上げられたと思っっています。

さて、小学校勤務だった三十代のはじめ、先輩教員から社会教育(ポイスカウト活動)の指導者を勧められ今日に至っています。そこでは日常的にマネジメント力を求められます。

魅力ある質の高い活動を提供できないでいると次回から子どもは集まってくなくなりませう。一般社会では当たり前ですが、日々評価・改善して成果をあげなければ団体の存在すら危うくなるわけです。

学校教育という枠を超えて多くの地域・異業種の方々とかかわることで校長として、人として成長させていただきました。日々改善の意識と感謝の気持ちで地域への恩返しをさせてい

ただきたいと考えています。

年譜

宮崎中学校長 藤本 正人



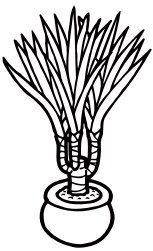
あつという間の三十八年間、私の中を駆け抜けた時間。大量採用

の時代に教員になったものの、自分ほど不適格な者はいないと思っった青年期。少し分かってくると、鼻高々になり怖いもの知らずの壮年期。いろいろな役割が与えられ、先が見えずにもがいた壮年期。そして経営者として責任ある立場となった壮年後期。そのどの期間にも、その時を生きた自分だけのエピソードがある。

そのいずれの時も、周囲の方が私を導いてくれた。あるときは親身に相手をしてくださった学年の先生や教科の先輩であり私が関わった子どもたちであり、あるときは馬鹿話に話を咲かせた同僚であり、あるときは恩師であり上司であり、またあるときは私を支えて下さった教職員の方々であった。

私は、そのつながりの中でその時代を生きてきた。晴れた日もあれば荒天の日もあった。どうにか、期間を全うできるのは、私に関わって下さった皆様方のおかげである。感謝申し上げます。

時が止まることはない。次の世代に日本の教育の未来を託そう。



教員として大切なこと

織田中学校長 上田 守



五六豪雪の四月に、教員としての道を勝山市立南部中学校で歩む

ことになりました。一年生を担任することになりましたが、右も左もわからない青二才ですから、授業づくり・学級経営・部活動と、校長先生をはじめ周囲の先生方には、常にアドバイスをいただいていたことが大きな支えとなりました。当時の南部中学校は、三年間クラス替えのない学校でしたので、子どもたちとじっくりと学級の活動などに取り組むことができ、同僚の先生方からは教員としてのあるべき姿を教えられました。改めてお礼を申し上げなければなりません。

さて、私の教員としての転機は三十才の時、中学校勤務から初めて小学校勤務になったことです。中学校での教員時代は、じっくりと子どもたちの心に寄り添うことができなかつたと反省する毎日でした。小学校に勤め始めた頃、子どもたちは意外にも中学生より言動がストリートで、私もうかうかできないなと感じたことを覚えていきます。しかし、思いを上手に伝えることのできない子どもたちもたくさんいます。そんな子どもたちと向き合い、心に寄り添うための十分な時間が、小学校

ではあったのだろうと思います。子どもたちの本音は、ちよつとした会話の中に見つけることができます。教員は、謙虚な気持ちで受け入れ真剣に伝えていけば、信頼関係は自ずと築かれていきます。その後の中学校勤務や小学校勤務においても、子どもたちの悩みや思いにしっかりと耳を傾け応えることで、教員として成長することができました。管理職になつても、子どもたちが困っているとき、頑張っているときにしっかりと関わること、教員として大切なことを見失うことなく進むことができます。教員としての真の姿は「師弟同行」にこそあるような気がします。

よき出会いに感謝

万葉中学校長 三田村雅人



私の教員生活は、担任時代、主任時代、行政・管理職時代がそれぞれ

三分の一ずつでした。

担任時代には、中学校の三年生を続けて担任することが多く、毎日学級便りを発行しながら悪戦苦闘する日々。その後は、図書館教育、道徳教育、小中連携教育、総合的な学習の時間と、学校を異動するたびに研究主任が続き、またまた悪戦苦闘の日々。そんな中でも、担任した生徒、部活動の顧問をした生徒とのよき出会い、先輩や同僚の先生方とのよき出会い

がたくさんありました。人と関われる教員という職業に就けた喜びを感じていた日々でもありました。

校長としては、一つ一つの学校に比較的長く勤務させていたことが、本当にありがたいことでした。そして、私の思いをくみ取り、ともに学校をよくしていこうとがんばってくれた先生方に感謝です。管理職は孤独だと言われますが、全く孤独は感じませんでした。思えば、生徒に恵まれた、先輩、同僚の先生方に恵まれた、幸せな教員生活でした。

多くの人に支えられて

武生第一中学校長 八田善憲



昭和五十六年四月に、新採用として春江中学校に赴任し、教員と

しての人生がスタートし、振り返ると、あつという間の三十八年間でした。校内暴力が吹き荒れる中、若さと情熱にまかせ体当たりで生徒と向き合ってきた二十代。仕事を任せられ、中堅として、自分の思いや悩みを先輩教員にぶつけながら、様々な経験を積ませていただいた三十代。県スポーツ課での四年間の行政経験を経て、主任として現場で学校運営に深く携わるようになった四十代。そして、教頭・校長として自らの方針に基づき、学校経営を担ってきた五十代。振り返れば、幾多の喜びと

あの笑顔を

南越中学校長 中山尚裕



この夏、新採用で初めての担任した学級のクラス会を開催するので

出席してほしいとの連絡を受け向かった懐かしい校舎で待っていたのは、私の退職を労う数々のサプライズだった。

新任式の直後、「さあ教室へ行ってください」と教頭先生に言われ、何をしたらいいのだろうと当惑していた私を、大きく見開いた瞳で迎えてくれた子どもたちとにかく無我夢中だった。失敗したことや、後悔したことがばかりが蘇ってくる。本当に長い坂道で駆け足で登って来たような気分である。なぜこんなに急いで登ってきたのだろうか。多くの人たちに迷惑ばかりかけ、申し訳ない想いと感謝でいっぱいである。最近は管理職として学校運営に携わるようになり、その責務のあまりの

重さ、多くの柵に苦悩する日も少なくなかったが、生徒の明るい笑顔と同僚の先生方に支えられる毎日だった。たくさんの方の生徒や先生方に出会えたことがかけがえない幸せである。初めて教壇に立った感動と子どもたちの笑顔をいつまでも忘れまい。

教師という「道」

南条中学校長 中村晴義



子どもと共にその成長を喜び合うことで勇気をもらい自身も成長

してきた三十八年間でしたが、不安や迷いも多い日々でした。そのような時に、よく読み返して前に進むことができた松下幸之助の言葉を教員生活の総括として記します。

自分には自分に与えられた道がある。天与の尊い道がある。どんな道かは知らないが、他人には歩めない。自分だけしか歩めない、二度と歩めぬかけがえのないこの道。

広いときもある。狭いときもある。のぼりもあれば、くだりもある。坦々としたときもあれば、かきわけかきわけ汗するときもある。

・・・中略・・・

他人の道に心をうばわれ、思案にくれて立ちすくんでいても、道は少しもひらけない。道をひらくためには、まず歩まねばならぬ。

心を定め、懸命に歩まねばならぬ。それがたとえ遠い道のように思えても、休まず歩む姿からは必ず新たな道がひらけてくる。深い喜びも生まれてくる。

喜怒哀楽の三十八年

東浦中学校長 角田 猛



私の教員生活は南越中学校から始まった。一年目は八回の研究授

業を行うなど、教員としての基礎が形成された。自分は中学校の体育教師だ、という自覚を持っていたが、結婚により小学校に異動し、中学校に戻ったのは三十二年後になってしまった。小学校では体育主任・高学年担任を長く務め、専門の陸上競技では児童を県大会で入賞させたり、全国大会にも出場させたりすることができた。転機となったのは、三方青年の家での四年間だ。そこでは社会人として、管理職としてのものの見方を教わった。

最後の三年間は小・中併設の小規模校だったが、素直な子どもたちや協力的な保護者・地域に恵まれ、校長として充実した毎日

を過ごすことができた。自分の足跡をたどると、もっと頑張れたのではないかと、自責の念で一杯だが、子どもたちや保護者、周りの方々に支えられて三十八年間、無事に勤め上げられたことに心より感謝とお礼を申

上げたい。

十八年教育の完成を目指して

三方中学校長 内田 雅文



「人生について児童生徒と共々語ることができない教師になりたい。」

など大上段に構えた目標を持つて教職に就きました。幸いなことに、小学校で十年、中学校で二十二年、高校で二年、嶺南教育事務所で教育相談四年と様々な発達段階の児童生徒と関わることができました。十八年教育を自己完結するために、後は、保育所勤務ができれば完成です。

実は、五十歳にして一念発起し、通信教育で学習し、保育士資格試験を受験しました。受験会場では試験監督と間違えられました。何とか合格、資格を得ることができました。

中学生の保育実習にかこつけて園児とセツシオンを重ね、益々の意欲が湧いてくるのを感じ、ハローワークと町役場の福祉課にパート勤務をお願いしているのですが、未だに雇ってやろうというお言葉を聞くことができません。います。

長年ご迷惑をおかけした方々に感謝申し上げつつ、次回は保育士として再会できますように……。」と祈っている私です。

県中学校教育研究会だより

県中教研会長

吉村 淑子 (至民中)

本研究会では、研究主題「生徒一人一人に基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等を育むとともに、学びを人生や社会に生かそうとする生徒を育てる教育活動の在り方」のもと、これに則って教科・領域のテーマを設定して実践を進めています。

それらの各校、市町、そしてブロックでの研究成果を全県的に共有し、授業実践の向上を図ることを目的に県研究会を、今年度は、八月十日に坂井市内の四つの中学校を会場に開催しました。酷暑の中、五百名を超える先生方が集い、熱心な研究協議が繰り広げられました。「主体的対話的で深い学び」を実現するための授業研究、その中でも「深い学び」に至る生徒の姿や思考過程についての話し合い、また学力の定着だけでなく、一人一人が豊かな人生を送ると共に、今後遭遇するかもしれない諸問題を解決し、次代を創る上で求められる資質・能力の育成についてなど、各分科会において活発な討議が行われ、大変有意義な研究会になりました。さて、いよいよ目前に迫った新学習指導要領の全面実施に向けて、分

づくりへと授業の質的な転換が強く求められ、教師自身の意識変革、授業改善が喫緊の課題として求められています。その課題に向けて、各研究部会、各ブロックでは、授業研究会や研修会が積極的に行われました。一方で、教員数の減少に伴い研究会の内容やブロック割りなどの見直しの声が挙がりました。このような県中教研の活動のさらなる充実とスリム化に向けては、市町間や教科間として県教委や市教委とあるいは小学校や高校と連携し、組織的に取り組むことが必要となります。そのためにも、全県が一つになって、活動の活性化と連携に向かつて、充実・発展していくことが今後益々必要だと考えます。

県中学校体育連盟だより

県中体連会長

小倉浩一郎 (成和中)

本年度は、「福井しあわせ元気国体・大会」が開催された年でした。五十年ぶりとなる開催で天皇杯・皇后杯獲得を成し遂げ、県内は大いに盛り上がりました。中体連としても、数年をかけ強化に取り組み、十五名の生徒が選手として出場し、努力が報われた瞬間でした。今後は、ポスト国体に向け、国体に向けた中体連としての団結、情熱をいつまでも引き継ぎ、また、より発展させなければならぬと考えます。

もう一つ記憶に残る出来事と言え、夏季大会を襲った「猛暑」です。大会期間中はもちろん、大会前後にも生徒の健康を心配される保護者の方から多くのお電話、メールをいただきました。各専門部の配慮により、重篤な事案発生を避けることができましたが、これからの大会運営について大きな課題であることを認識させられました。

さて、部活動に関わる先生方の関心事と言え、運動部活動におけるガイドラインではないでしょうか。生徒の健康面等に配慮したものの、中学教員の働き方改革の柱と言えます。

戦後のスポーツ普及・強化に大きく貢献してきた中体連の活動でしたが、生徒、保護者の価値観の多様化、あるいは少子化が加速的に進む中で、持続可能な部活動を目指す必要が生じてきています。今後は、生徒に望ましいスポーツ環境を約束し、生涯豊かなスポーツライフに繋げていくという本来の目的を目指す、学校教育活動の一環としての中体連に復帰する必要があります。

管理職がイニシアティブを発揮し、指導に当たる先生方全員が、強

